

# 公孫樹

東京都立  
豊多摩高等学校  
令和8年3月  
第69号  
東京都杉並区  
成田西2-6-18  
TEL 03(3393)1331



## 「努力×全力×あきらめない」

学校長 高見澤 健吾

先日開催されたミラノ・コルティナオリンピックでは、日本勢過去最高のメダル数を獲得し、その活躍する姿は大きな感動をあたえてくれました。最高の舞台を楽しみながら、全力を出し挑み続けた選手たちの姿はとて新鮮であり、たいへん魅了されました。中でも印象深かったのは、フィギュアスケートのペアで日本勢初の金メダルに輝いた「りくりゅう」こと三浦璃来、木原龍一組の演技です。今大会、優勝候補にあげられていた2人でしたが、得意のリフトでミスが出てしまいショートプログラム5位発進と出遅れ。首位と6.00点差で臨んだフリースケートイングでしたが、結果的には、歴代世界最高得点の158.13点をたたき出している逆転優勝。最終グループ4組の演技が終わり、金メダルが確定すると会場は大歓声に沸き、三浦選手は一瞬呆然となるも、号泣する木原選手と抱き合ったシーンが感動的でした。翌日の記者会見で、三浦選手は「諦めずに前を向いたことで金メダルにつながった。本当に私たちから伝えたいのは、どんなことがあっても絶対諦めない気持ちを持つことが本当に大切」と振り返っています。

一方の木原選手は、心が折れてしまつていたと明かし、コーチから『野球は九回の3アウトが取られるまで試合は終わらない。絶対諦めるな』と。すごく勇気づけられました。次の日、朝から涙が止まらない状態でしたが、みんなが本当に僕の心をもう一度奮い立たせてくれました。このオリンピックで、口で言うのは簡単ですが『諦めないことの大切さ』を改めて学びました。」と振り返っています。

特に勝負の世界では、「諦めないこと」がとても重要ですが、折れた心をもう一度戻し、さらに奮起させたことのおすげが伝わってきます。

「まだ終わっていない」「絶対にできる」と言い聞かせ、再度気持ちを奮い立たせたこととやこれまで積み上げてきた努力の成果が結果に結びついたのだと思います。「奇跡は待つのではなく、起こすものだ」と強く感じました。

努力に勝る才能なし。どんなに能力があっても、いかなる人も努力する人にはかなわないという意味です。今回のオリンピックから、努力することの尊さ、その努力



を信じ、あきらめないことの大切さを改めて学びました。

大関の相撲、名優の芝居、幼稚園の運動会、見ていると涙が出る。

全力があまりに神々しいからである。

はちぎれるほどに熟したスイカの美しさ。

咲けるだけ咲いた野菊の美しさ、

全力は美である。

力いっぱいあらわれは、何でも人を引き付ける。

これは、社会教育者の後藤静香さんの詩です。常に目指せる目標をもち、その目標に向け全力で取り組むことを心がけたいですね。

Touch the Sky! TOYOTAMA!

## 「念ずれば花開く」

副校長 土崎 祐一郎

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。希望した進路の実現ができた人もそうでなかった人も必死になつて努力し続けてきたと思います。努力したその過程を今後の成長の糧として、自分自身の可能性を信じてこれからも精一杯頑張ってください。保護者の皆様におかれましては、長い間のご指導が実を結び、心よりお祝い申し上げます。学校とも連携・協力していただきありがとうございます。

1年生、2年生の皆さん、進級おめでとう。1年生は、これまで通っていた中学校での学校生活から一変し、大半

の学友が公共交通機関を利用して通学することとなり、午前8時30分から直ちに授業が始まり、授業内容も濃くレベルも上がり大変だったと思います。2年生は、授業と並行しながら学校行事や部活動の中でそれぞれが役割を担い、仲間とともに協力しながら運営に携わってきたと思います。この一年間の経験を次に生かしてください。

科学技術の発展やグローバル化の進展により、社会の変化のスピードは加速度的に速くなっています。決して平坦な道ではありませんが、うまく対応しながら自分の力で自分の生き方をみつけて、充実した人生を送ってほしいと思います。「念ずれば花ひらく」と思いつつ、激励の言葉とします。

## 「平凡の非凡」

進路図書部 本間 武志

進路指導を担当して改めてここ数年における入試方法の多様化を意識しました。R3年から「センター試験」が「共通テスト」に変更されました。新学習指導要領の対応にもなつて共通テストに教科「情報」が加えられ、「数学」「国語」の試験時間が延長されるなど詳細にわたればきりがないほどの変化がありました。選抜方法・時期についても多様化し、保護者の方々の時代にあつた「小論文入試・一芸入試・A0入試」などが総合型選抜と名称を変更するとともに、学校推薦型選抜（指定校・公募）での募集をする大学も増えました。一般入試は国立公立受験に必須である共通テストを私立大学も利用して、受験の機会を増やした大学も増えました。また昨年度からは一部大学で年内入試とよばれる試験期日を早倒しした選抜も行われました。いずれにしろ大学側も様々な物差し（尺度・評価方法）で人物を評価し、専門学問領域における研究の深化と日本の社会（のみならず世界）に貢献できる人材を求めている結果の

ようです。

さて、このような多様な選抜方法で未来社会に各自の得意な能力で社会貢献をすることのできる人材を求めめる希望進学先に対して、いま、ここ豊多摩高校ではどのような人物を求めているのでしょうか。やはり校訓「自主自律」を目指していこうとする根幹の教育理念は変わらないでしょう。だからこそ勉学と学校行事と部活動を大事にする意識はとも高いいと思います。そしてその目標に向けてなすべきことは、各自が進路目標を探し出し、その目標に向けて日々精進することでしょう。「将来」やりたいことが見つけられれば、「過去」の自分を振り返りつつ、「今」なすべきことが明確になると思います。そして当たり前のことを当たり前にすること。高校生らしい平凡さが実は非凡につながるものと思います。



## 「一生の課題」

三年主任 上野 隆彦

高校生だったころ、将棋部の合宿に顧問の先生が現れました。当時は列車や宿の手配、集金、精算まで、部のすべてを生徒がとりしきっていて、先生はふだんの部活動や大会にかかわることはありませんでした。合宿で初めて顔を見た先生は、将棋を二、三局指して帰っていききました。猛烈サラリーマンで深夜帰宅が多かつた父とはだいぶ様子

が違っていて、なんかとても楽しそう（に見えた）。これだけが動機ではありませんが、楽しかつた高校生活が教員をめざすきっかけになったことは事実です。教職に伴う膨大な雑務や責任、ストレスや長時間労働などは、高校生の私には考えが及びませんでした。

教員になってから、クラスの生徒といっしょに「進路適性検査」を受けたことがあります。当時から社交性の乏しさの自覚はあり、案の定、教員適性は低いという診断結果でした。残念。でも、向いているかどうかは別として、その後何十年も教員をつづけていて、今も豊多摩高校で幸せに過ごしているのです、自分にとってはこの道が正解だったと考えています。

進路選択は私にとつて過去の話ではありません。今、何よりも恐れているのは引退です。年齢を重ねると、いずれ退職して第二の進路に進まねばならない時期が訪れます。しかし、引退後に何をしたらいいのだろう。何も仕事をせずに生きていくことも可能ですが、社会との接点を持つて、何らかの形で貢献もしたい。でも具体策が見えず、内心あせっています。生徒には「進路探究」を要求しながら、自分についてさえ決められないとは、なんとという体たらくか。

私が言いたいのは、進路選択は一生の課題となりうる難問だということです。自分の場合、高校時代は進路が明確なつもりでしたが、教職の表面的な部分しか見えてなくて、今思えばまったくオソマツでした。皆さんはどうですか。まだ先が見えない人も多いかもしれませんが、高校段階では、漠然と方向性が見える程度でもいいんじゃないかと個人的には思っています。未熟な段階で自分の可能性を極端に限定してしまうと、かえって危険な場合もあります。高校生の今は何でも吸収すべき時期ではないでしょうか。今後進学するなどしてさまざまな人から刺激を受ければ自分の世界が広がり、進路認識も深まることと思います。私も自分の道を見つけるため、引き続き努力します。